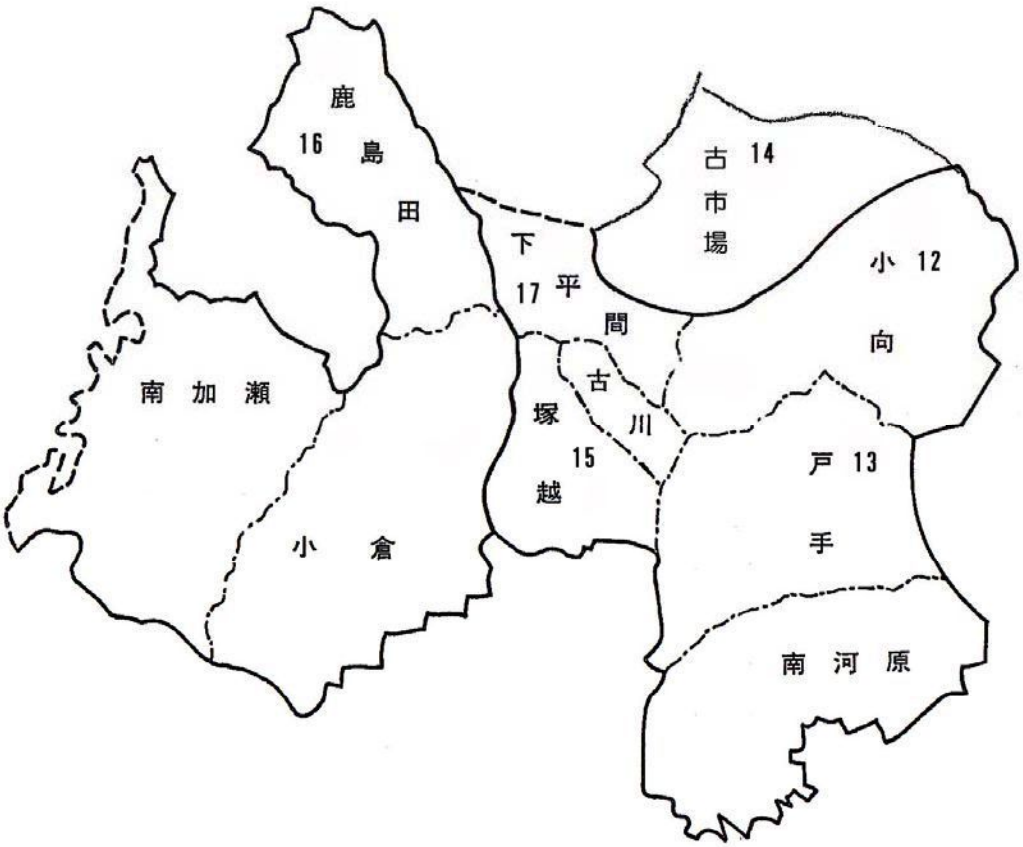
幸　区



幸区のなりたち

幸区は川崎区の西北に位置し、北は多摩川をへだてて東京都大田区に、西側は矢上川・鶴見川が境となって横浜市港北区・鶴見区に対しています。

古代から橘樹郡（たちばなぐん）に属し、中世には加瀬庄（かせのしょう）や平間郷の名がみられます。江戸時代には、南河原・戸手・小向・下平間・古川・塚越・鹿島田・小倉・南加瀬・北加瀬の 10 村がありました。（古市場・矢上は後に編入された地域です。）
これらの村々はみな幕府の直轄領＝天領でしたが、のちに 8 村が増上寺領になりました。

明治 22 年市制町村制が施行されて、これらの村は統合されてより大きな村に形をかえました。南河原・戸手・小向・古川・塚越・下平間の 6 ヶ村と、中原区側の中丸子・上平間の 2 村が合併して御幸村をつくりました。この名前は、明治 17 年に小向へ観梅に明治天皇が行幸(ぎょうこう)されたことにちなむものでした。
一方、鹿島田・小倉・南加瀬の 3 村は、矢上川対岸の矢上・駒林・駒ヶ橋・箕輪の 4 村と合併して日吉村をつくりました。この名前は、駒林村金蔵寺の日吉社の存在にちなむものとされています。北加瀬村は北側の住吉村へ入りました。（ただし、大正 15 年に日吉村に編入しています。）明治 45 年に府県境変更があり、東京側の古市場村が神奈川県側に移り、御幸村に編入されました。

大正から昭和にかけて、地域の工業化がすすめられ、東海道線の西側に大工場が沢山建てられて行きました。貨物の品鶴線が通り、広大な新鶴見操車場もつくられました。
大正 13 年に御幸村は川崎町・大師町と合併して川崎市となり、昭和 12 年に矢上川の東側の北加瀬・南加瀬・小倉・鹿島田が川崎市に編入しました。（駒林・駒ヶ橋・箕輪は横浜市に編入しました。矢上の一部は川崎市に入りました。）
昭和 47 年、川崎市は区制をしき明治につくられた御幸村の名にちなみ、区の一つとして幸区がつくられました。

小　向【KOMUKAI】

❍ 場所

小向は幸区の東北部にあり、北から東にかけて多摩川がぐるっととりかこむように流れています。多摩川に対して、「張り出した形をしている」ともいえます。

❍ 由来

地名の由来は定かでありません。

ただし、地名を見る際には、文字よりも言葉の音（オン）を重くみることにより、由来の一端をひもとくことができます。この場合は、向（むかい）という音です。小や大はその上につくかざりの言葉としてうけとればいいのです。

大向・小向という地名は全国に沢山あります。共通点は、みな川の曲流点（きょくりゅうてん＝大きく曲がるところ）に面して、向こう岸に大きく対面しているような地形のところです。ここも多摩川の曲流部にあり、東京都大田区の矢口や六郷に大きく向いあっているところからの地名だと考えられます。

エピソード

小向では、江戸時代のはじめから梅が植えられ始めたと言われ、江戸に梅の実がさかんに売り出され、村の主産業のひとつとなりました。そのため春先には村中が白梅の香りにつつまれたといいます。

御幸公園にある明治天皇臨幸記念碑

明治 13 年、成島柳北という人が新聞に「小向探梅の記」を発表し、それにより小向梅林の名は東京にもひろまり有名になりました。その評判を聞いた明治天皇が、明治 17 年にこの地に行幸（ぎょうこう）され、観梅を楽しみました。これは村にとっては大きな出来事で、のちに御幸公園に記念碑がたてられました。

明治 22 年、小向・戸手など 8 村が合併して、新しい大きな村ができましたが、この時天皇の行幸の地にちなんで「御幸村」（みゆきむら）の村名が採用されました。現在の幸区の区名も、昭和 47 年区制施行のときに、旧御幸村の名からとったものです。また幸区の南部に幸町・中幸町・南幸町がありますが、これらも旧御幸村の名にちなんだものです。

戸は　外ということ

戸　手（TODE）

❍ 場所

幸区のほぼ中央部に戸手 1～4 丁目・戸手本町 1～2 丁目・戸手の町があります。これは、江戸時代にこのあたりにあった「戸手村」の名前をひきついだものです。昔の戸手村の範囲はもっと広く、戸手のつく町以外に、神明町・紺屋町・河原町をふくむ地域にひろがっていました。

❍ 由来

「戸手」という地名の由来は定かでありません。そこで言葉を分析（ぶんせき＝こまかく分けて研究すること）してみると、トは外を意味し、テ・デは方面を意味する語なのです。これをあわせて考えると、トデは「外の方面」という意味の言葉になります。戸という字はあとからのあて字と考えられ、もとは「外手」であったと思われます。

「外の方面」とはどういうことでしょうか。多分「土手外の地」ということでしょう。江戸時代初期には、この村のことを「戸出」と書いていた資料があります。外へ出た部分という意味になる表記であり、この地がそういうところであっただろうと推定されます。

エピソード

広島県にも戸手があります。芦田川に張り出した形の地域です。東京都墨田区に外手町がありました。ここも隅田川の桜土手の外に位置していたことからの町名でした。

こういうことから、幸区の戸手もかつては「土手外の地」であったと考えられ、それが地名になったのでしょう。長い歴史の中で多摩川の流れも変わり、人々による開発が進みました。集落がつくられて村の様子も大きく変わり、地名だけが昔を語るようになったといえます。

新市に対しての　古市か

古市場(HURUITIBA)

❍ 場所

幸区の北部に位置する地域です。北に多摩川が流れ、西北の隣は上平間です。南から東にかけては小向で、西南は下平間です。

❍ 由来

「古市場」という地名の由来は定かでありません。古（ふる）というのは「昔」ということなので、古市場というのは「むかし盛んな市がたっていた地」ということまでは分かるのですが、それ以上については分かりません。

この地の地名由来には次のような見方があります。

1、　村内に古い天神社があり、昔そこで年に二度大きな市が立ったことに由来するというもの。

2、　鶴見の市場町に対して、こちらが古い市場町であるというもの。

エピソード

この地は昔は多摩川の北にあり、今でいう東京がわに属する土地でした。戦国時代までは多摩川は古市場の南がわをぐるっと廻りこんで流れていました。それが戦国時代の終わりの大洪水で川の流路が北へ変わり、半島形に突き出している部分が川の南がわに切り離されてしまいました。

それでも江戸時代をとおして、荏原郡六郷領に属して、村は今の東京がわの地として過ごしてきました。明治になってもこれはそのまま続き、東京府荏原郡古市場村となっていました。明治 22 年には、荏原郡矢口村大字（おおあざ）古市場となりました。

ところが明治 45 年に府県境変更（東京府と神奈川県の境を変えること）が行われて、「多摩川の流路の中心の線を境界線とする」ことになりました。これにより、古市場の川北の部分は東京がわに残りましたが、川南の古市場の大部分が新しく神奈川県がわの村となったのです。すなはち、神奈川県橘樹郡（たちばなぐん）御幸村大字古市場となりました。以後は他の地域と同じ歴史をたどります。

塚　越【TSUKAGOSI】

❍ 場所

幸区の中央部に塚越 1～4 丁目があります。この地域は、江戸時代には塚越村があったところで、町名は村名をうけついだものです。

❍ 由来

塚越の地名は、この地に古墳と思われる古い塚があることにちなんだものです。ここは多摩川沿岸の沖積低地の土地で、そこに古墳があるのは珍しい例です。その古墳と思われる塚は、塚越 2 - 18 の地に現存します。

塚越の地名にかかわる塚

この地は、鎌倉時代初期、北条氏によって下平間・・鹿島田・古川などと一緒に開発されたと伝えられています。塚越と言う地名もその頃からのものだといえるでしょう。地名の由来については、二つの説があります。

１、「塚腰」説。古くは塚腰であったとするものです。腰というのは塚の麓をいう言葉で、「塚の周辺の村」という意味になります。現在もこの周辺の土地を「塚の腰」とよんでいます。

２、「塚越」説。この地を鎌倉古道が通っていました。鶴見―矢向―塚越―平間―矢口の渡しのルートだったようです。ここには、今もある塚のほかに、もうひとつ塚があったようです。塚越 1 - 6 の御岳神社が建つ小さな高みがかつては塚であり、この二つの塚の間を古道が越していったので、塚越とよばれたというものです。

エピソード

塚越村の小名(こな＝江戸時代のアザ)に「袋」というのがあります。今の塚越 1 丁目一帯の地です。フクロという地名は普通、川が大きく曲流(きょくりゅう)して、袋状に土地を取り囲む形になった所につく地名です。しかし、一つの川に取り囲まれたものではなく、二つの用水路である川崎・大師堀と小田・町田堀に取り囲まれているため、「袋」という小名で呼ばれているのです。

鹿島神社に関係あり

鹿島田【KASIMADA】

❍場所

幸区の一番北にある地域です。ＪＲ南武線と横須賀線が走り、新鶴見操車場があります。東西をその線路にはさまれた形の南北に細長い地域が鹿島田です。明治時代のはじめまで、鹿島田村という一つの村でした。現在の幸区鹿島田に中原区大倉町をふくむ範囲がこの村でした。

❍由来

「鹿島田」の地名のおこりは鎌倉時代初期ころと言われています。鎌倉時代のはじめ、多摩川沿いの沖積低地（ちゅうせきていち＝川が運んできた土砂がつもった低く平らな土地）を開発した武士が、その土地を守るために鎮守さまのお宮をつくり、その神様として武神として名高い「鹿島の神」を常陸（ひたち＝今の茨城県）から勧請（かんじょう＝神のみたまを分けてもらってまつること）したものと思われます。そして、その社（やしろ）に土地の一部を寄進して社領としたことが地名の由来と思われます。

鹿島神社

つまり鹿島田というのは、「鹿島神社の社領の地」ということだと考えられているのです。

エピソード

鹿島田の小名（こな＝江戸時代の字アザ）に面白いものがあります。その一つは「赤面」（せきめん）と言う地名です。村の北部の呼び名ですが、これは恥ずかしい思いをして赤い顔をしたということではないのです。

「セキメン」という音（おん）から検討してみると、これは「堰免」という言葉がもとにあったのです。それが永い歴史の中でもとの字が忘れられ、ちがう文字で書かれるようになってしまったとうことです。

それでは、堰免とはどういうことでしょうか。これは「用水路の堰の維持・管理費をだすための免田地(めんでんち)」という言葉です。その土地からの収穫は、用水路の堰を守るために使うという、その土地の性格をあらわしているのです。

下平間【SHIMOHIRAMA】

❍ 場所

幸区の中央部北寄りに位置する地域です。隣接する地域は、東は古市場、南は古川、西は鹿島田、北は中原区上平間です。江戸時代初期に幕府の方針で上平間村と下平間村に分けられました。

❍ 由来

「ヒラ」という言葉は、「平らな」ということをあらわし、「マ」は「ところ」を意味します。そうすると「ヒラマ」は「平らなところ」という地名になります。多摩川に面して低く平らな土地が一面ひろがる地ということでしょう。川を基準にして、上流がわが上平間、下流の方が下平間です。

エピソード

地域の中央部北寄りに「称名寺」(しょうみょうじ)という寺があります。このお寺に「赤穂浪士」に関係する話が伝えられています。

元禄 15 年、吉良の屋敷への討ち入りを目指していた赤穂浪士のリーダー大石内蔵助は、京都を離れ江戸を目指しますが、その途中この下平間に 10 日間滞在したそうです。そして、前もって江戸にいた同志を呼んで、この地で討ち入り計画について相談したとのことです。その時残された文書や赤穂浪士の遺品などがいくつか、この寺にはあるそうです。

また別の話では、この寺の山門には竜の彫刻がほどこされていますが、伝えではこれは左甚五郎(ひだりじんごろう)の作だということになっています。名人による名作なので、この竜はまことに生きているようで、毎晩山門からぬけだして村の田畑を荒らしたそうです。困った村人は、竜が動けないようにと、目玉に五寸釘を打ち込んだところ、竜はおとなしくなったと伝えられています。